巻頭言

自然の景観を大切にしたい

荒牧重雄　東京大学名誉教授　山梨県環境科学研究所所長

日本の山野は美しいといわれる。われわれ日本人が想う美しい景観とは、たいてい山紫水明、森や林と緑の原と農地の連続といった風景であろう。温帯から亜熱帯の湿潤気候帯の植生が標準といえるかもしれない。また、裸岩がべったり露出する地表は、日本ではあまりお目にかからない。裸地や荒地が多い大陸地域を旅行してから日本に帰国すると、日本がいかに緑したたる国であるかを再認識して、新鮮な驚きを感じる。

しかし、日本のように緑が豊富な地域は地球上ではむしろ少ないといえるのではないか。半沙漠としか言いようのない土地に、多くの人々が生活している。その沙漠状態の少なからぬ場合が、自然にそうなったのではなく、森林の過伐採や過度の農作業により土壌が失われ、沙漠化への悪循環が進行するためであると聞く。日本は、幸いにもこれまでは、森林や農地の保全が行き届いたために、このような沙漠化は免れてきたのかもしれない。

■

私ごとであるが、火山を研究している専門から、日本や諸外国の火山地域を歩き回ってきた。緑したたる日本の自然を歩くとき、どうしても気になることがある。それはくっきりとした白い直線が目に入ることである。多くの場合、それは林道を縁取るガードレールなのである。いったん気になると、ガードレールの存在はつねに気になるようになってきた。決して広々としてはいない日本の山地形の斜面に、あんなところにも車道があるのかと思わせるような高所にその白い直線が見られる。

外国の山地では、日本のような頻度でガードレールが設置されているところは少ないのではなかろうか？　例えば、アメリカの国立公園の中をレンタカーで通行するときも、ガードレールが少なくて、砂利道をドライブするのが怖いくらいの山道が少なくない。日本の道路網の安全整備はこのように進んでいて、インフラストラクチャーの完成度の高さを示す指標なのであろう。

しかし、ガードレールの白い線を見るたびに、私は居心地の悪さを感じる。どうしても気になる。そう思って気づくのは、自然景観の中では、直線という画素はめったに存在しないということである。すべてが曲線か折れ線であり、破線である。また白色というのは、雪景色でもないかぎり、自然の中では案外異端な色なのである。すぐ思い至るのは、日本でも国立公園などでは、電柱の色も褐色に塗装するように指導（？）されていることである。建物の色もそうである。やはり、自然景観に配慮すれば白色は避けるべき色なのではなかろうか？

国土交通省は2004年３月に、「景観に配慮した防護柵の整備ガイドライン」をまとめたが、その中では、おおむねガードレールの色を白色ではなく、こげ茶、薄灰茶色、濃灰色などにするのが適当としたと聞く。大いにわが意を得たという感じである。

さらに言えば、折れ曲がったり、部分的に赤錆が発生したガードレールの汚さは、気を滅入らせるものがある。私がたびたび訪れる軽井沢地域の道路では、一部、間伐材を用いた木製の

ガードレールが設置されているが、見た目にきわめて心地よいものである。おそらく、製作単価は鉄製の何倍も高いのではないかと思われるが、日本の経済状態では、この程度の贅沢さは許されるのかもしれないとも思う。この点は専門家の解析を待ちたいものである。

先年、東南アジアの国の火山のふもとをドライブしていたら、すばらしい緑の山すそに、一本鮮烈な白い直線が延びていた。あまりにも日本的な印象に、はっとしたのだが、後でその白線は、日本からのODA援助で作られた真新しい砂防ダムのコンクリートの輝きであったことがわかった。やはり、その印象は「白い直線の暴力」と呼ばれても仕方のないものであった。

長年火山屋として、火山砂防にかかわる方々とお付き合いしているので、火山地域の砂防ダムなどの建設にかけられる熱意と善意のエネルギーを疑うものでは決してない。日本の砂防グループのおかげで、特に火山地域の斜面の保全が、日本のみならず外国でも大いに進展してきたことは、世界に誇れる業績であるといえるだろう。

■

このような実績を踏まえて、あえて提言したいのが、砂防事業でも、そろそろ自然景観への濃厚な配慮がなされてもよい時期になったのではないかということである。

一口に自然景観といっても、いろいろな見かた、定義のし様があるだろう。私が問題としたいのは、人が見て「美しい」、「気持ちが良い」、「いやされる」という反応を引き出すような景色のことである。最大公約数としてこのような反応を引き出せるような景観は、保全の価値があると考える。

私自身の好みを持ち出して恐縮であるが、景観の美を損ねる要素として、直線の氾濫、景色になじまない色彩などが警戒の対象となる。そこで困るのが、砂防ダムをはじめとする人造の工作物である。これらの多くは、直線の組み合わせからなっている。非直線から構成される自然景観の中では、直線が際立ってしまう。

人工の直線が全て悪いというつもりはもちろんない。世界遺産として誰も疑わない、かのベルサイユ宮殿の庭園、いわゆるフランス式の幾何学式庭園などはその極致であろう。しかし、そのような庭園はそれ自体で完結しており、明瞭な輪郭を持つ、いわばひとつの小宇宙とでもいうべき完結性を持っている。一方、自然景観の中の直線的異物は、周囲の要素となんら調和の取れていないことが問題なのである。

滑らかな曲線を描く火山の中腹から山麓にいたる緩斜面は、それ自身たいへん美しいものだが、扇状地を輪切りにする形で、いくつもの砂防ダムの直線が切り込んでいるのは、決して美しいものではない。

日本では、火山地域の多くが国立公園などに指定されていて、景観美が公認されている場所ともいえる。そこに多くの直線的構築物が目立つことは、金銭的に言えば、観光産業にも悪影響を与えかねない問題である。

■

それではどうしたらよいのか？　私は、決して砂防ダムの構築をやめろというのではない。問題なのは、遠景あるいは中景として見たばあいに、白色の直線的なダムなどが目立つことがよくないということである。私はダムの設計者でもなければ、施工者でもないので、素人的無知で言えば、ダムの存在が見えないようにすればいいのではないかと思う。たとえば、白色のコンクリートを暗色に塗れば見えなくなるだろう。石を貼ってもよいだろう。木や草などを貼り付ければわからなくなるだろう。このような試みは、河川の堤防などですでに実施されていると聞いている。水の流れも直線ではなく、わざわざ曲線状に流すとも聞く。

このような工法は、おそらく従来のそれよりも、単価が高くつくだろう。費用対効果の見地から、国策に逆行するものとして、これまでは

退けられてきたのに相違ない。そこで、一国民として、納税者として、発言したいのは、このような景観対策は決して無駄使いではなく、今後の正しい方向を示すものではないかということである。限られた広さの日本列島を、破壊的に「改造」するというようなやり方はもう通用しなくて、より高度な工法で、あくまで景観を損ねないように、しかも高性能でより能率的に斜面安定・治水の実をあげるという戦略はいかがであろうか。

■

日本の庭園文化は世界に誇れるものであると聞く。いわゆる鑑賞式庭園にしても遊歩式庭園にしても、自然の景色を写生したものか、さらにそれを抽象化したものが主体であって、その造成には作者の莫大な精神的エネルギーが費やされている。回遊式であれ、書院式であれ、枯山水であれ、手本は天然の景観であり、縮小された宇宙である。そこには川、水の要素と山、岩石の要素が芸術的に組み合わされて、美の世界を構築しているのである。石組み、砂紋、築山、池、滝などの要素を組み合わせて、自然を模写しているが、あくまでも人工の世界であるという言い方もできる。

今の日本ではしかし、そのような芸術的空間に感激して寺院の外に出ると、まったくの別世界として、無神経きわまる、雑然とした都市景観、あるいは破壊されつつある田園景観が広がっている、というのが現実ではなかろうか？ われわれ日本人は、如何に複雑で不合理な民族なのであろうか？　日本人が持つ庭園の美術的感性を、なぜ自然の景観の保全に活用しないのだろうか？　平常は水が流れない砂防ダムの在る河川の景観は、まさに「枯山水」そのものであるといえよう。

■

火山景観から見ると、景色は緑したたる世界ばかりではない。火山の噴火は既存の風景を破壊さえする。新しい溶岩流が広がる面積は、まったくの無人の荒野である。大規模な火砕物の降下は、広大な地域を一時的に沙漠と化し、不毛の土地とする。実は火山の研究者にとっては、その光景も、自然の営みの一部であり、実に「美しい」ものなのである。しかし、荒野とか不毛の地とかの形容は、あまりにも否定的である。なぜ火山研究者にとって「美しい」かというと、その状景が火山学的に見て、自然で、合理的であるからである。

火山現象を知らないものにとっては、荒廃した混沌でも、火山研究者にとっては、「アア溶岩」であり「パホイホイ溶岩」であり、網状流路であり、溶岩堤防であり、それぞれが火山学的にいかにも自然で、納得がいくものなのである。このような要素に直行する、直線的な人工構造物は「美しくない」のである。

そのような意味では、草木が一本もない裸地でも、自然の造型の美が存在しうるのである。裸地、裸岩をきらって、見境なく人工的な植林をしたり、緑草の種を一面に吹き付けたりする工法は、沙漠に住む民族にとっては、きわめて奇異に見えるのかもしれない。

■

とにかく、ひとつの理想として、将来の日本は、限られた空間をより快適に合理的に生活できる空間として、「改造」してゆかなければならないだろう。それには、自然災害による国土の破壊・荒廃はもちろん徹底的に防がなければならない。しかしそのために、景観美を破壊しては、「元も子もなくなる」のである。

高度のテクノロジーは、近代的な造園術として、表面には人為としては見えないが、美しい景観を保全するために、裏では高度の手厚い人工の技が用いられているというように活用されるべきであろう。